

父との夏

作・高橋いさを

「登場人物」

○ 野川幸太郎

○ 野川哲夫（その息子）

○ 野川洋子（哲夫の妹）

○ 川上順子（哲夫の婚約者）

○ 金坂省平（少年兵）

○ 白鳥政江（洋子と二役）

1く六年ぶりの帰省

二〇〇三年、八月——夏。

舞台は、東京都下にある野川幸太郎の家。
築二十年余りの一戸立て住宅の日本間。

舞台奥に出入り口があり、人物の登場と退場はそこから行われる。
その上手側に仏壇。

壁にハンガーにかかった男ものの喪服がある

畳敷きの部屋の真ん中に大きめの卓袱台。

卓袱台の上にくつかガラスが載った盆。

座布団は脇に寄せられて置いてある。

また、舞台手前に小さな庭があり、そこから人物は登場する。

また、回想の場面は庭面を使用する。

遠くで蝉の鳴き声——夕刻。

玄関の開く音。

順子（声） こんにちはッ。

洋子（声） いらっしやいッ——あれ、一人？

順子（声） うん。

洋子（声） 兄さんは？

順子（声） 川見てくるとか言つて——そこに。

洋子（声） もー何やつてんのよッ。ささ、入つてッ。

やつて来る洋子。続いて、順子。

洋子 さ、どうぞどうぞッ。汚いトコですけど。さあ、どうぞ。

順子 お邪魔します。

洋子はパンツ・ルック。順子はサマー・ドレス。

順子は菓子折りの包みを持っている。

洋子、前方の庭先へ行き、

洋子（外へ） 兄さん、何してるのよッ。早く来てッ。（順子に） いっしょに来ないでどうするのよねえ。

順子 お父さんは？

洋子 もうすぐ帰ってくる。釣りに行っちゃったのよ。

順子 そう。

洋子 それより、どう？

順子 え？

洋子（庭面を示す）
順子 大丈夫。来る前にもちゃんと話はしたから。
洋子 ……そう。
順子 どうかしたの？
洋子 そんなたいしたことじゃないんだけど。
順子 うん。
洋子 最近、何となくヘンなのよ、お父さん。
順子 からだの具合でも？
洋子 じゃなくて——何となく情緒不安定って言うか。
順子 ……。
洋子 ——来た。

と哲夫が庭先に出てくる。

バッグを持ったラフな格好の四十代の男。

洋子と順子、不安を消して平静を装う。

洋子 何突っ立ってんのよ。
哲夫 できたんだ——。
洋子 え？
哲夫 あれ。（と前方を示す）
洋子 ああ、橋ね。とつくよ。
哲夫 いつ完成したの？
洋子 もうずっと前。
哲夫 ……へえ。
洋子 懐かしい？
哲夫 まあ、な。
洋子 しばらくぶりだもんね。

哲夫、縁側に座って靴を脱ぐ。

洋子 玄関から入ってよ、我が家なんだから。
哲夫（腰を上げ）……親父は？
洋子 すぐ戻ってくるわよ。
哲夫 どこ行ったの？
洋子 釣りよ、釣り。
哲夫 釣り？
洋子 うん。
哲夫 いいのかよ、そんなことして。
洋子 さあ。

哲夫 さあつて——手術したんだろ。

洋子 あたしに聞かないでよ。

哲夫 だつてお前、電話で今にも死にそうだとか何とか。

洋子 ちよつと大袈裟に言つたかも。ハハ。

哲夫 ハハじゃねえよ。……ツたく、オレだつてそんなに暇じゃないんだからな。

洋子 兄さん、そうでも言わなきゃ帰つてこないじゃない。

哲夫 別に（そんなことはない）……。

洋子 いいじゃない。もう何年も帰つてきてないんだから。いい機会。顔見せて親孝行しなさいッ。

哲夫 何だよ、せっかく帰つてきたのに、出迎えもせずに。

哲夫、バッグを持って玄関の方へ去る。

順子 あ、これ、つまらないものですけど。

と菓子折りを差し出す順子。

洋子 ご丁寧に。（とそれを受け取る）

順子 アップルパイ、お好き？

洋子 大好き。ハハハハ。

順子 よかった。それにお母さんの大好物だつて聞いたから。

洋子 そうなのよ。いただきます。

哲夫、部屋に入ってくる。

哲夫 すげえ人だよ——駅前。

洋子 ああ——今日はね。もうすぐ花火大会だから。

順子 何時からでしたっけ？

洋子 七時半から。御飯、食べたら行つてきなさいよ、二人で。

哲夫 （どこに置いていいか迷い）……バッグ、ここでいいか。

洋子 どこでもいいわよ、そんなのッ。

と菓子折りを仏壇に供える洋子。

洋子 よく覚えてたわね。

哲夫 何が。

洋子 これ——アップルパイ。母さんが好きだったってこと。

哲夫 まあな。

洋子 あ、お線香あげてね、お母さんに。

哲夫 ……。

洋子 何よ。

哲夫 やけにかいがないしいじゃねえか。何か企んでるんじゃねえのか。

洋子 何も企んでなんかいいわよ。何言ってるのよ。

順子 ……。

洋子 ほら、座ってないでお線香あげて。

哲夫、壁の喪服を見て、

哲夫 誰か亡くなったの？

洋子 え——ああ、お父さんの友達。

哲夫 豆腐屋のおじさん？

洋子 じゃなくて、戦争の時の——。

哲夫 誰？

洋子 金坂さんよ。

哲夫 誰だっけ。

洋子 ほら、子供の時、一度、千葉の海行ったじゃない。お父さんの戦友の。ホテル経営してる。

哲夫 ああ——こんな太った親父だ。

洋子 そうそう。母さんの葬式ですごいハリキって働いてた——。

哲夫 いつ？

洋子 先週よ、脳溢血だった。

哲夫 ふーん。

哲夫、仏壇の前に来る。

洋子（哲夫に）六年分、ちゃんと拝んでね。

哲夫 ……。

順子 洋子さんも大変よね。

洋子 何が？

順子 その後、哲夫さんからいろいろ——。

洋子 どうせロクなこと言っていないでしょうけど。

哲夫、線香に火をつけて、香炉に立てる。

チーンと真鍮のりんを鳴らす。

哲夫（手を合わせる）

洋子 なんて？

順子 ハイ？

洋子 なんて言ってる、あたしのこと？

順子「親父の面倒、みんな押しつけちゃってほんとにすまない」って。

洋子 そう言えって言われたんでしょ。

順子 違うわよ。ほんとに――。

洋子 へえ。こんな浮き世離れたアニキでも、一応、人並みのこと考えるんだ。

哲夫 それより、洋子。お前はどうかんだよ。

洋子 何よ、どうって？

哲夫 その後だよ。お前だっていつまでも一人ってわけいかないだろ。

洋子 しばらく男はパス。

哲夫 そんな呑気なこと言ってもらえる場合かよ。年齢を考えろ。もうそんなに若くないんだからな、お前も。

洋子 ハハハハ。

哲夫 何だ。

洋子 お兄様からそんな説教されるとは思わなかった。

哲夫 ふざけるな。真面目な話だ。

順子 大丈夫よ。洋子さん、まだこんなにキレイなんだから。

洋子 もうすぐ汚くなるってこと、それ。

順子 あ、いえ、別に――ハハ。ゴメンなさい。

洋子 ハハハハ。

順子 お店はどこに？ 近くにあるんですか。

洋子 通ってこなかったの？

哲夫 遠回りじゃないか。

洋子 たった二、三分じゃない。(順子に) 駅前の商店街にあるの、お店は。

順子 そうなの。

洋子 あらやだ。あたし、お茶も出さないで。すぐ、ゆっくりしてね。我が家だと思って。

順子 どうも。

と部屋から出ていく洋子。

哲夫の横に来る順子。

順子 どう？

哲夫 どうって？

順子 六年ぶりの我が家は？

哲夫 別に。

順子 よかったじゃない。

哲夫 何が。

順子 お父さん、元気みたいで。

哲夫 けど、アイツもアイツだよ。電話じゃ今にも死ぬかもしれないみたいなこと言っといてさ。

順子 帰ってきてほしかったのよ。だから、そんな嘘をついたんじゃないの。

哲夫 ……。

順子 何となくあたしはわかるけどな。
哲夫 何が。

順子 洋子さんの気持ち。

哲夫 何だよ。

順子 この前、紹介してもらった時にいろいろとね。

哲夫 何だよ、いろいろって。

順子 あなた長男でしょ。妹さんだっていつまでもお父さんの世話ばかりじゃアレだもの。だから、あなたに帰ってきてもらって、いろいろ手伝ってほしいこともあるのよ。

哲夫 ……。

順子 あたしそんなに悪い仕事だと思わないけどな。

哲夫 何が。

順子 自転車屋さん。

哲夫 お前は何も知らないからそんなこと言えるんだよ。

順子 そうかな。

哲夫 あれ大変なんだよ。朝から晩まで他人の乗る自転車のボルトくりくり回して、パンクしたタイヤに空気入れて、油で手なんか真っ黒で。洗っても落ちないんだよ、あの油。

順子 ふーん。(外を見て) 橋——。

哲夫 ああ、川がすぐそこにあるから。

順子 そう言ってもんね。

哲夫 あの橋さ。

順子 うん。

哲夫 オレが親父とアレしてこの家、出た時にはまだ作ってる最中だったんだ。

順子 へえ。

哲夫 よく覚えてる。ここから見た作りかけの橋。

順子 ……。

と洋子が冷えた麦茶と瓶ビールを持って戻ってくる。

洋子 帰ってきた、お父さん。

哲夫 ……。

と庭先から野川幸太郎がのそつとやって来る。

帽子を被り、手に釣り竿を持っている。

幸太郎 よう。

哲夫 ……どうも。

洋子 父です。

順子 初めまして。川上順子です。

幸太郎 どうもどうも、よく来てくれました。すまん、こんな格好で。

洋子 ほんとよ。せっかく一人息子が彼女、連れて久し振りに帰ってきたっていうのに。
幸太郎 もっと早く帰るつもりだったんだが、川で本村さんに会ってな。

洋子 いいから、早くこっちにッ。

幸太郎 うむ。

洋子 釣れたの、何匹かは。

幸太郎 いや——。

と、幸太郎は縁側に座って、長靴を脱ごうとする。

洋子 玄関から入ってよ。靴下、あつちで脱いでから。

幸太郎 ……。

順子（哲夫を見て）ふふふふ。親子よね。

哲夫 ……。

洋子、麦茶をコップに入れながら、

洋子 元気なの、本村さん？

幸太郎 ああ。もうすっかりいいみたいだ。

洋子 父の釣り仲間なの。駅前の乾物屋の旦那さん。

順子 はあ。

哲夫 大丈夫なのかよ、釣りなんかして。

幸太郎 大丈夫だ。

哲夫 まったく洋子が電話で大袈裟なこと言うから、心配したよ。

幸太郎 ……。

洋子 ほら、お父さん——早く。

幸太郎は玄関の方へ去る。

洋子 お茶どうぞ。（と麦茶を出す）

順子 いただきます。

洋子 ハイ、兄さんも。（と出す）

哲夫 ……。

洋子 何よ。

哲夫 痩せたな、親父。

洋子 手術してから少しね。

哲夫（飲む）

洋子（奥に）お父さん、着たもの洗うんならそこに脱ぎ捨てないでねッ。

順子、写真立てを手に取る。

幸太郎、哲夫、洋子——そして母親の政江の写った家族写真。

順子 これが、お母さん？

洋子 あ、そう。

順子 何年前でしたっけ、お亡くなりになったの。

洋子 今年で七回忌。

順子 (写真の) 哲夫さん、若いッ。

哲夫 ……。

洋子 兄さん。

哲夫 何だよ。

洋子 少しは愛想よくしてね、お父さんに。

哲夫 わかってるよ。

洋子 喧嘩はもうたくさんだからね。

順子 大丈夫——あたしもいますし。

洋子 そうね。フフ。

順子、線香をあげる。

と幸太郎が部屋へ戻ってくる。

洋子 ヤだ、お父さん。着替えないの？ お客さんがいるのに。

幸太郎 自分の家だ。

洋子 あ、これいただいたの、アップル・パイ。

幸太郎 そうか。そりゃどうも。

哲夫、正座する。

順子もそれに倣う。

哲夫 どうも、ご無沙汰してます。(と頭を下げる)

幸太郎 うむ。

哲夫 こちらが、お付き合いしてる川上順子さん。

順子 始めまして。

幸太郎 父の幸太郎です。

順子 おからだの具合はいかがですか。

幸太郎 大丈夫です。

洋子、コップにビールを注ぐ。

洋子 さ、じゃ乾杯しよう。

哲夫 いいのかよ、飲んで？

洋子 少しだけならね。

ビールの入ったコップを持つ人々。

幸太郎 ——何に乾杯するのかな？

洋子 何でもいいわよ。

幸太郎 じゃあ、わたしの健康と幸せを祈って。

洋子 どーいう乾杯よッ。ここは順子さんを立てるのが筋じゃない？

順子 哲夫さんの久し振りの帰省でいいんじゃないですか。

洋子 いいわよ、そんなの、別に。

哲夫 あーもうッ、家族の幸せにでいいじゃないか。ハイ、乾杯ッ。

と乾杯をする人々。

洋子（幸太郎に）普通、音頭取る人そう言わないよ、自分のことだけ。

幸太郎 それもそうだな。

洋子 何真面目な顔して言ってるのよ。

順子 ハハハハ。

幸太郎（飲んで）……。

洋子 ——何か言つてよ。

幸太郎 何？

洋子 せつかく兄さんが彼女連れてきたんだから。

幸太郎 何を言うんだ。

洋子 だから、「どこで知り合ったの、二人は？」とか。

幸太郎 うむ。

幸太郎、ビールを飲む。

幸太郎 どこで知り合ったんだ、二人は？

洋子 そのまま言わなくてもいいわよッ。

幸太郎 ……。

洋子 ごめんなさいね。

順子 いいですよ、そんなに気を使わないでください。

哲夫 少しうるさいよ、お前。

洋子 だってあたしがしゃべらないと二人とも押し黙るじゃない。

順子 まあ、そんな喧嘩しないで。（幸太郎に）仕事で知り合ったんです。あたし、ナレーターの仕事してまして。テレビやラジオの。

洋子 コマーシャルよね。

順子 そう。で、哲夫さんの書いた台本のアレで。

洋子 何のコマーシャル？
哲夫 知ってるじゃねえかよ、お前。
洋子 インタビューア―として聞いているの。
哲夫 なんでお前にインタビューされなきゃいけないんだよ。
洋子 いいじゃない、聞いても。
順子 便座クリーナーです。
洋子 そうなのよ。
順子 「これを使えば便座スツキリ――魔法の便座クリーナー」みたいな。
洋子 そのコマーシャルの仕事で知り合ったのよ。
順子 ええ。
洋子 いっぱいある商品のなかで、なんで出会いのきっかけが便座クリーナーだったのかって――この前、この話聞いた時も大笑いよ。
順子 ほんと。
洋子 よりにもよって便座とねえ。
哲夫 何度も言わなくていい。
順子 だから、馴れ初め聞かれる度に困るんです。
洋子 ハハハハ。
幸太郎 どのくらいなんだ、付き合って。
順子 もう三年です。初めてデートしたのは、二〇〇〇年の今頃でしたから。
幸太郎 そうか。
洋子 いいの、ほんと、こんな(男)ンで。
順子 今のところは。
洋子 ボロ出さないようにしないとね、兄さん。
順子 フフフフ。
洋子 ま、とにかくこんなヤツだけどよろしく頼みます。
哲夫 お前に言われたくないけどな。
洋子 ハハハハ。
幸太郎 ……。
洋子 ヤだ、あたしばかりしゃべってる。
幸太郎 ……で、どうだ。
哲夫 え？
幸太郎 順調か、仕事は？
哲夫 うん、まあ。
幸太郎 ちゃんと食えてるのか。
哲夫 まあ、一応。
幸太郎 そうか。
順子 新しい脚本、書くのよね。
哲夫 うん、まあ。
順子 話もらったらしいんですよ、有名なプロデューサーから。来年の戦後六十周年に合わせた大きな

舞台の。知りませんか、ほら銀座にできた新しい劇場の。

洋子 へえ。で、どんなの書くの？

順子 戦争を題材にしたヤツだって。

洋子 戦争？

順子 だから、戦争のこと聞きたいって言ってみましたよ、お父さん。（哲夫に）そうよね。

哲夫 まあ。

幸太郎 ……。

洋子 脚本もいいけど、お金にならないことばかりじゃ困るわよ。

哲夫 大きなお世話だ。

洋子 いつもこんな調子。苦勞するわよ、順子さんも。こんなものいっしょになったら。

順子 はあ。（と苦笑）

哲夫 とところで、大変だったね、親父さんも。

幸太郎 何がだ。

哲夫 何がだって手術だよ。

幸太郎 たいしたことはない。

哲夫 洋子が大袈裟なこと言うから、心配したよ、ほんと。まあ、こうして酒が飲めるんだから少しは安心したけど。

幸太郎 よく言えるな、そんなことが——見舞いも来ないで。

哲夫 ……。

洋子 お父さん——。

遠くで蝉の鳴き声。

洋子 あ、おなか、どう？ 減ってない？

哲夫 ああ、ボチボチかな。

洋子 じゃあ、あたし支度してくるから。

順子 手伝いしましょうか。

洋子 大丈夫。

哲夫、立つ。

洋子 何よ。

哲夫 いや、オレも何か手伝おこなって。

洋子 いいわよ。今日の主役がいなくてどうすんのよ。

哲夫 ……。

洋子（順子に）じゃこっちの二人をよろしく。何かあったら呼んでね。

順子（うなづく）

洋子 ごゆっくり。——あ、三杯以上は飲ませないで。

洋子、その場を去る。

順子 とつてもきれいなところですね。

幸太郎 ありがとう。

哲夫は座らずにウロウロしている。

幸太郎 順子さん、兄弟は？

順子 弟が一人。

幸太郎 ご両親は健在ですか。

順子 父は二年前に亡くなって。

幸太郎 おいくつで。

順子 えーと六十六でした。

幸太郎 そうですか。

順子 お父さんはおいくつですか。

幸太郎 一九二八年生まれ。もうすぐ七十五。

順子 嘘ッ。お若いわ、すごくー（哲夫に）何ウロウロしてんのよ。

哲夫 ……。

順子 ふふふふ。

幸太郎 ？

順子 よくわかります、こういうきれいなトコへ来ると。

幸太郎 何がですか。

順子 哲夫さんがこういう素直な人になった訳が。ふふ。

幸太郎（苦笑）

遠くで蝉の声。

幸太郎 結婚するのか。

哲夫 え？

幸太郎 この人と。

哲夫 まあ。

幸太郎 まあって何だ。

哲夫 ゆくゆくはそうなるだろうな。

幸太郎 じゃなきや連れては来ない、か。

哲夫 まあ。彼女もバツイチでね。

順子 お恥ずかしいですけど。

幸太郎 そうか。

哲夫 まあ、オレもこんなだし、まあ、組み合わせとしちやいいんじゃないかな。

順子 ちょっと失礼な言い方ね。フフ。

哲夫 ハハ。

遠くで蝉の鳴き声。

哲夫 まだ怒ってる？

幸太郎 何がだ。

哲夫 だから、ここ出てく時、えらそうなこと言ったから。

幸太郎 ……。

哲夫 けど、オレもこうして何とかやってるし、あんな時はもう忘れてよ。

幸太郎 何だ、謝りにきたってわけか。

哲夫 まあ。

幸太郎 ……。

哲夫 もうオレもいい年齢だし、いつまでもこんなじゃアレだし。

幸太郎 ……。

哲夫 それにもうすぐ母さんの七回忌だし、オレもちゃんとしなさいといけないとも思うしさ。

幸太郎 あいつ（洋子）がそう言えって言ったのか。

哲夫 ちがうよ。

幸太郎 ……。

哲夫 そりゃあいつはあいつでいろいろ助言もしてくれたけど。

幸太郎 順子さんの前でこんなこと言うのはナンだがな。

哲夫 何だよ。

幸太郎 こっちは出てけと言った覚えはない。お前が勝手に出てったんだ。

哲夫 そりゃそうだけど。

幸太郎 けど何だ。

哲夫 ……もういいよ。

幸太郎 その上、六年も音沙汰なしで、よく平気な顔して家の敷居が跨げたもんだ。

哲夫 ちょっと待ってよ。そういう言い草はないんじゃないか。

幸太郎 何だ。

哲夫 なんでオレがここ出たかわかってるのかよ。こっちの気持ちも知らねえで。

幸太郎 嫁さん連れて謝りに来たんじゃないのか。

哲夫 そうだよ、そうだけだよー！。

順子 やめてくださいッ、二人とも。（哲夫に）約束したばかりじゃない、喧嘩はしないって。

哲夫 だって、一方的に親父が妙なこと言うから。

幸太郎 妙なことは何だ。

哲夫 ……もういいッ。帰る。

幸太郎 ああ、帰れ帰れッ。

と立ち上がる哲夫。

哲夫 行くぞッ。

順子 ちよっと——。

哲夫 いいから、来いッ。こんな頑固じじいと話してても埒が開かねえ。

順子 子供みたいなことやめてよ。座って、もうッ。

と揉み合う二人。

と洋子が枝豆を持って出てくる。

揉み合いに巻き込まれる洋子。

洋子 あ——。

と枝豆を辺りにぶちまけてしまう洋子。

洋子 もう、何してるのよ、もう——。

とそれを拾う洋子と順子。

順子 何ボケッとしてるのよッ。拾ってよ、それ。

哲夫としぶしぶと枝豆を拾うのを手伝う。

洋子 いい加減にしてよね。会ってまだ五分も経ってないのに、こんな。

幸太郎 ……。

洋子 喧嘩はしないって言ったでしょッ。

哲夫 ……。

幸太郎と哲夫、枝豆を食べる。

順子 (哲夫を叩く)

哲夫 痛テ。

洋子 お父さんッ。

幸太郎 ……ああ、悪かった。

洋子 ほんとごめんなさい。

順子 いいえ。

洋子 もう——二人とも何考えてんのよッ。

順子 ここはあたしに。

洋子 でも——。

順子 大丈夫。

洋子 じゃあ何かあったら呼んで。(と行くようにして) ビールは三杯までだからね。

と出て行く洋子。

幸太郎 お前がどう思ってるか知らんが、言ったことは嘘じゃない。

哲夫 ……。

幸太郎 しかし、手術してオレもめつきり気が弱くなった。

哲夫 ……。

幸太郎 昔の友達もみんなどんどんいなくなる。

哲夫 うん。

幸太郎 いつまで、ココ（頭）がちゃんとしてるかもアレ（自信ない）だ。

哲夫 ……。

幸太郎 だから、こうしてお前と話す時間もそう多くはない。

哲夫 ……。

幸太郎 それにいつまでもこんなじゃ——母さんもきつと悲しむ。

哲夫（うなづく）

幸太郎 今日はお前の嫁さんになってくれる女の人もいる。

哲夫 うん。

幸太郎 前みたいにいがみ合うのは——もうよそう。

哲夫 ……。

幸太郎 だから、今日は飲め。

哲夫 ……。

と哲夫にビールを注ぐ。

幸太郎 順子さんも。（と注ぐ）

順子 ハイ。

ビールを飲む三人。

蝉の鳴き声。

幸太郎 気を悪くするな。ここんトコ、ちよつといろいろあつてな。

哲夫 ……。

幸太郎 戦争の話を書くのか？

哲夫 え？

幸太郎 さつき言ってたろ、そんなこと。

順子 そうなんです。けど、せつかくの大きな仕事なのに何か行き詰まってるみたいで。フフ。

哲夫 別にそういうわけじゃ——。

幸太郎 次の公演は決まってるのか。

哲夫 何の。

幸太郎 お前の劇団のだ。

哲夫 見る気もなくせに。
幸太郎 ……。

順子、哲夫を促す。

哲夫 ……まだだよ。

幸太郎 そうか。

順子 哲夫さん言っていましたよ。小学校の時「両親に聞く戦争体験」っていうのがあったんですよ——文集だっけ。

幸太郎 ああ。

順子 あれ今でも覚えてるって。

幸太郎 ほう。

順子 ほら。

哲夫 細かいところは忘れたけど、親父がこう言ったのはなぜか覚えてて。

幸太郎 なんて言った？

哲夫 「オレが行かなきゃ日本は負ける」——。

幸太郎 ハハハハ。

哲夫 違ったっけ？

幸太郎 いや、そう言った。そう思ってたよ、ほんとに。

哲夫 昭和三年生まれだよね、親父さん。

幸太郎 ああ。

哲夫 つまり、アメリカと戦争が始まった時、まだ十二歳でしょ。

幸太郎 そうだ。

哲夫 親父さんが出征したのは——。

幸太郎 十七だ。昭和二十年。

哲夫 子供じゃない、まだ。

幸太郎 今とは感覚が違う。当時は、立派な大人だ。

哲夫 まあ、だからって何をどう聞けばいいのかわからないけど、何が一番印象に残ってるのかなあって思っ

幸太郎 ……。

哲夫 ま、話したくないなら別にいいけどさ。

と、洋子が来る。

幸太郎 何だ。

洋子 大丈夫よね。

哲夫 何が。

洋子 だから——。

順子 大丈夫。

洋子 そう。……ふふふ。こゆっくり。(と行こうとして)三杯までよ。よろしく。

とそそくさとその場を去る洋子。

遠くで蝉の鳴き声。

幸太郎 この間、金坂が死んでな。覚えてるか。

と壁の喪服を見る幸太郎。

哲夫 ああ——さつき、あいつに聞いた。

幸太郎 そうか。

哲夫 前に会った時の感じだと、百まで生きるって感じだったけどなあ。

幸太郎 うむ。

哲夫 けど親友ってわけじゃないだろ。そんなちよくちよく会ってたわけじゃないだろうし。

幸太郎 確かにそうだ。しかし——。

哲夫 うん？

幸太郎 人間ってのは、生き死にをともにしたヤツのことをそう簡単には忘れないもんだ。

哲夫 ……。

幸太郎 (順子に) 金坂っていうのはわたしの戦友だね。

順子 へえ。

幸太郎 とは言え、あいつといっしょに戦場で鉄砲、撃ってたわけじゃない。

順子 と言うと？

幸太郎 戦争の始まりと終わりにそいつといっしょだったんだ。

哲夫 どういうこと？

幸太郎 (順子に) つまらんでしよう、こんな話。

順子 いえ。是非あたしも聞きたいです。

幸太郎 ……。

幸太郎、ビールを飲む。

幸太郎 名前は金坂——年齢はオレと同じ十七だ。

哲夫 (枝豆を食っている)

幸太郎 聞きたかったんじゃないのか、そういうことを。

哲夫 ああ。

幸太郎 こんな話は二度とできないかもしれん。だから、よく聞いとけよ。

哲夫 (うなづく)

幸太郎 戦争が始まったのは昭和十六年の十二月八日。オレは十二歳だ。日中戦争を含めると父さんが生まれてから日本はずっと戦争してたって時代だ。

哲夫 ……。

幸太郎 アメリカとの戦争が始まってすでに四年。昭和二十年の五月。志願して兵隊になった十七歳のオレは、八戸——青森にある所沢整備学校八戸教育隊に所属することになって上野から列車に乗る。

と幸太郎は立上がり、回想が始まる。

幸太郎、どこからか古びた帽子を取り出して被る。

そして、荷物を持って庭面に下りる。

上野駅の喧騒が聞こえてくる。

幸太郎は縁側を越えて庭面に降りる。

そして、列車に乗り込む体で通路（庭）を進み、座る。

哲夫と順子は、和室上からそれを終始、見ている。

哲夫 どのくらいかかるの、上野から八戸まで。

幸太郎 二十時間だ。

哲夫 二十時間？

幸太郎 今なら東北新幹線で二時間もかからないその距離が当時はそのくらいかかったんだ。

順子 どんな人が乗ってるんですか、その列車に。

幸太郎 いろいろだ。オレみたいな兵隊や、食糧を調達するために田舎に行く人たちで列車はすし詰めだ。

順子 へえ。

幸太郎 大人のつもりでもしよせん十七のガキだ。この先どんな試練が待ち受けてるのか——心細い旅だった。

哲夫 ……。

幸太郎 そんな時、同じ列車で金坂に出会った。

と荷物を持った帽子をかぶった国民服の若い男——金坂がやって来る。

幸太郎も金坂も、ともに十七歳の少年兵である。

金坂、人々の間を縫って進み、幸太郎の横に座る。

金坂、泣いていたのか、袖で涙を拭っている。

ポーツという汽笛が聞こえる。

列車がガクンと動いて発車する。

金坂（窓外を見て） ……。

幸太郎（同じように窓外を見て） ……。

金坂（泣く）

幸太郎 大丈夫？

金坂 すんませんッ。（と涙を拭く）

幸太郎 出征ですか。

金坂 え？

幸太郎 青森へ。

金坂 ああ、ハイ。陸軍の候補生です。

幸太郎 オレもです。

金坂 そうなんですか。

幸太郎 野川です、野川幸太郎。

金坂 金坂です。金坂省平。

幸太郎 よろしく。

金坂 こちらこそ。

幸太郎 ハハハハ。

金坂 ハハハハ。

と笑うがすぐに意気消沈する金坂。

幸太郎 いやあ、心強いですよ、同じところへ行く人間といっしょに乗れて。

金坂 はあ。

幸太郎 いい話し相手ができて、うれしいです。ハハ。

金坂 失礼ですけど。

幸太郎 ハイ。

金坂 オレとそんなに年齢、変わらないですよね。

幸太郎 どうだろう。オレは十七です。

金坂 やつぱり。ハハハハ。

幸太郎 じゃあ、君も。

金坂 ハイ。

幸太郎 そうか。そりゃ何て言うか奇遇だな。

金坂 ほんとに。

幸太郎 あ、これ食べますか。

と干芋を荷物から出す幸太郎。

幸太郎 母が持たせてくれたんです、列車で食えつて。

金坂 でも。

幸太郎 気にしないでください。たくさんありますから。

金坂 じゃあ、お言葉に甘えて。ありがとう。

と干芋を受け取る金坂。

以下、それを食べながらの会話。

幸太郎 不躰かもしれないけど。

金坂 ハイ。

幸太郎 なんで泣いてたんですか。

金坂 ……。

幸太郎 いや、この時代、泣きたいことなんかたくさんあるから、いちいちそんなこと聞くのアレだけ
ど。

金坂 はあ。

幸太郎 別にいいんですけど、ちょっと気になったから。ハハ。

金坂 こんな景色見るのも。

幸太郎 え？

金坂 もしかして、こんな景色見るのも、これが最後かもしれないと思うと、何か悲しくて。

幸太郎 なるほど。でも、大丈夫だよ。必ず死ぬと決まったわけじゃない。

金坂 そうですよ。

幸太郎 それに、負けるはずないよ——日本が。

金坂 うん。

と干芋を食べる金坂。

幸太郎 (哲夫らに) 今思えば、どんな根拠があったわけじゃない。けど、日本が負けるなんてとても信じられなかった。

哲夫 なんで？

幸太郎 なんでかなあ。ただ闇雲にそう信じていた——そうとしか言い様がない。そして、それはオレだけじゃなかったと思う。

哲夫 ……。

走る列車内の金坂。

金坂 (泣く)

幸太郎 大丈夫？

金坂 すまないッ。どうしても感情が押さえ切れなくて。

幸太郎 今度はどしたの、いったい。

金坂 いや、こんな干芋食べるのも、これが最後かと思うと、何か悲しくて……。 (と泣く)

幸太郎 言ったろう。死ぬと決まったわけじゃない。

金坂 ……そうだよ。死ぬと決まったわけじゃないもんね。

幸太郎 ああ。

金坂 ハハハハ。

と干芋を食べる金坂。

幸太郎 金坂くんがいいかな。

金坂 うん。

幸太郎 金坂くんはどこから？

金坂 小金井です。

幸太郎 じゃあ、オレとそんなに遠くない。

金坂 どこ？

幸太郎 八王子。

金坂 へえ。

幸太郎 実家は何を。

金坂 両親は二人とも小学校の教師を。

幸太郎 へえ。

金坂 野沢くんは？

幸太郎 野川、野川幸太郎。

金坂 あ、ゴメン。野川くんは？

幸太郎 親父が自転車屋を。

金坂 兄弟は？

幸太郎 姉が一人。

金坂 オレには妹が。まだ女学生だけど、とても可愛いコなんだ。これが妹。

と写真を出す金坂。

それを見る幸太郎。

金坂 可愛いでしょ。

幸太郎 うん、可愛いッ。(哲夫に) そんなに可愛くなかった。

哲夫 そうなの？

幸太郎 ああ。けど、可愛くないとは言えなかった。

順子 ハハ。

走る列車内の金坂。

金坂 これがお袋、これが親父。(と説明する)

幸太郎 立派なご両親だ。

金坂 妹は裁縫が得意で、これも妹が作ってくれました。

と、首に巻いていたタオルを出す。

幸太郎 へえ。

金坂 (泣く)

幸太郎 ……。

金坂 すまないッ。妹のこと思い出すと、何か悲しくて……。

幸太郎 気にするなよ。気持ちにはわかるよ。

金坂 すまないッ。(と泣く)

哲夫 よく泣く男だな。

幸太郎 (哲夫らに) ああ、よく泣くヤツだった。風景を見て泣き、干芋を食って泣き、妹の作ったタオルを見て泣いた。「男の子は簡単に泣くなッ」——そう親父に教育 されていたオレにはちよつと珍しいタ

イブだった。

哲夫 うん。

幸太郎 だいたい当時の兵隊は子供でも滅多に泣くヤツなんかいない。二十時間——最初はいい話し相手ができたと喜んだのも束の間、この泣き虫男を相手に二十時間 をともにするとは。「こりゃとんでもない野郎と道連れになったもんだ」——心の なかでそうつぶやいた。

ガタンゴトンと走る列車。

金坂 飛行場ですよね、僕らが行くところ。

幸太郎 うん、八戸飛行場。

金坂 何するんだろう。

幸太郎 飛行機の整備と飛行訓練じゃないかな。

金坂 乗りたい？

幸太郎 そりゃ戦争するなら、やつぱりねえ。「敵機来襲！ 撃てッ。ガガガガガ！」なんて。ハハハハ。

金坂 ハハハハ。……会えてよかったよ。じゃ、オレは……。

と幸太郎から離れようとする金坂。

幸太郎 ちよちよちよつとッ。

とそれを止める幸太郎。

幸太郎 どこ行くのッ。

金坂 放して——放してくれッ。

幸太郎 大きな声、出すなよッ。(周囲の架空の人々に) すいません。

と金坂を席に戻す幸太郎。

幸太郎 何だよ、突然。走る列車から飛び下りるつもりかよ。

金坂 (憤然と) ……。

幸太郎 どしたの、いったい？

金坂 好きなのか、戦争が。

幸太郎 え？

金坂 好きなのか、殺し合いが？

幸太郎 いや、別にそういう意味じゃないけど。

金坂 じゃあどういう意味だよ。

幸太郎 ……。

金坂 「敵機来襲！ 撃てッ。ガガガガガ！」——冗談じゃないよッ。敵だって血の流れる人間だッ。

幸太郎 シッ。(と金坂を座らせ) だって、オレたち戦争に行くんじゃないか。
金坂 軽蔑されるかもしれないけど。

幸太郎 うん？

金坂 オレは死にたくない。

幸太郎 ……。

金坂 だってそうじゃないかッ。オレたち、まだ十七なんだッ。

幸太郎 大きな声を(出すな)——。

と金坂の口を押さえる幸太郎。

金坂、その手を邪険に払いのける。

金坂 ……。

幸太郎(哲夫らに)「オレは死にたくない」——金坂はオレにそう言った。そんなコイツを見て、オレがどう思ったと思う？

順子 さあ。(と哲夫を見る)

哲夫「この非国民が！」

幸太郎 いや、なんて正直なヤツなんだ——オレはびっくりしたんだ。

哲夫 ……。

幸太郎「天皇陛下のために、お国のために死ぬ」——当時の兵隊には当然なことだった。だが、兵隊も人間だ。心の奥底では、オレもそう思っていた。けれど、それを口に出すことはとても恥ずかしいことだった。だから、オレは、この泣き虫野郎の率直さに感動させた。しかし——。

哲夫 しかし？

幸太郎 簡単に同調はしなくなかった。

ガダンゴトンと走る列車。

幸太郎 ひとつ聞いていいか。

金坂 ……。

幸太郎 志願したんじゃないのか、日本帝国のために。

金坂 ……。

幸太郎 守ろうと思ったんじゃないのか——両親を、妹を。

金坂 ……。

幸太郎 そのために戦おうと思ったんじゃないのか。

金坂 ……。

幸太郎 そう思ったから、この列車に乗っているんじゃないのか。

金坂 ……。

幸太郎 もしそうなら、そういうことは、二度と口にしない方がいい。

金坂 ……すまない。

幸太郎 ……。

黙って列車に揺られる二人の少年。
踏切りを列車が通過する音。

金坂（泣く）

幸太郎 ……。

金坂（そんな涙を袖で拭っている）

幸太郎 ハハ。

金坂 ？

幸太郎 ハハハハ。ハハハハ、ハハハハ。

と愉快そうに笑い出す幸太郎。

金坂 何だ、何笑ってるッ。（と少し怒って言う）

幸太郎 いや、ゴメン。ハハハハ。

金坂 軽蔑したろう、「このフヌケ野郎が！」そう思ったろう。

幸太郎 いや——。

金坂 何とでも言えッ。

幸太郎 メソメソするなッ。いつまでもメソメソしてるとココから外へ放り出すぞッ。

金坂 ヤヤヤヤだッ。それだけは勘弁してくれッ。

と座席にしがみつく金坂。

幸太郎 ハハハハ。

金坂 ？

幸太郎 ッたく、とんだ野郎といっしょになったもんだ。ハハハハ。

金坂（幸太郎の笑顔の意味がわからず） ……。

幸太郎（哲夫らに）愉快だった。けれど、なぜか涙が出てきた。

哲夫と順子は、幸太郎が涙をためているのを一瞬見た。

と列車はトンネルに入る。

轟音とともに暗くなる列車内。

哲夫 ……暗いのはなんで？

幸太郎 トンネルに入ったんだ。

薄暗い列車に揺られる二人の少年。

列車、トンネルをくぐり抜ける。

幸太郎 「とんだ野郎と道連れになったもんだ」——最初はそう思った。けれど、その青森行きの方きの列車は、オレにとって忘れ難い思い出のひとつになった。それは、この金坂という同い年の少年と出会ったからだ。

踏切りを列車が通過する音。

金坂 聞いてくれるか。

幸太郎 ああ。

金坂 オレ、喧嘩は嫌いなんだ。

幸太郎 そうか。

金坂 親父は体操の先生だ。だから、メソメソしていると殴られる。

幸太郎 当たり前だ。ハハハハ。

金坂 ハハハハ。野沢くんは喧嘩が好きか？

幸太郎 野川、野川だ。

金坂 あ、ゴメン。

幸太郎 ……。

金坂 好きか、喧嘩？

幸太郎 さあ、どうかな。

金坂 好きと見たな、オレは。

幸太郎 勝手なこと言うな。

金坂 だって「敵機来襲！ 撃てッ。ガガガガ！」なんて空想してるんだろう。

幸太郎 何が悪い？

金坂 特別攻撃隊のこと知ってるか？

幸太郎 え？

金坂 敵艦に飛行機ごと体当たりするアレ。

幸太郎 ああ。

金坂 できると思うか？

幸太郎 何が。

金坂 だから、敵艦にそんなこと。

幸太郎 ……できる。

金坂 ほんとに？

幸太郎 ああ。

金坂 どうして？

幸太郎 どうしてって——国を守るためだ。

金坂 ……そうか。

幸太郎 金坂くんはできないのか。

金坂 とてもそんなこと——。（と首を横に振る）

幸太郎 ……。

金坂 軽蔑されるようなことばかりだな、オレ。

幸太郎 軽蔑はしない。

金坂 ほんとに？

幸太郎 ああ。世の中にはそういうヤツもいる。

金坂 そうか。(と喜ぶ)

幸太郎 けど、神様にお願ひしたいよ。

金坂 何を。

幸太郎 戦場でお前みたいなヤツとだけはいつしよに戦うことにならないようにって。

金坂 ほんとに。

幸太郎 ハハハハ。

金坂 ハハハハ。(と笑うがすぐに意気消沈して) ……。

幸太郎 落ち込むなよ、冗談だよ。

金坂 いや、ほんとそうだと思う。

ガタゴトと走る列車。

幸太郎 (哲夫に) 「特別攻撃隊」のことは知ってるよな。

哲夫 一応。

幸太郎 オレも一歩間違えば、太平洋の海に消えていたかもしれん。

哲夫 馬鹿げたことだと思っ、そんなやり方？

幸太郎 戦後は、ひどく評判は悪いが。

哲夫 うん。

幸太郎 命を捨てて国を守るうとしたヤツが当時の日本にはいた——それは事実だ。

哲夫 ……。

幸太郎 国——それは他ならぬ故郷であり、母であり、姉であり、妹だった。

と順子を見る幸太郎。

順子 ……。

幸太郎 母さんがまだ生きてる頃、二人で九州の知覧の記念館に行った。

順子 チラン？

哲夫 九州の特攻基地のあった場所。

幸太郎 何て言えばいいのかな——あんなに涙が溢れてきたことはない。

哲夫 ……。

幸太郎 「かくすれば国難突破できるならいかでや軽きわが生命(いのち)かな——こんなことを二十歳にもならない少年が書いていたんだ。

哲夫 ……。

幸太郎 気付くと、金坂はまた泣いていた。

ガタゴトと走る列車内。

金坂（泣いている）

幸太郎　だが、もうなぜ泣いているかは聞かなかった。泣こうと思えばいくらでも泣ける——言われてみれば、その通りだった。窓の外を流れる田園の風景や晴れ渡った五月の空を眺めることもしていつしよにいるということ自体が、貴重な——二度と体験できない愛しい時間に、頬を触るさわやかな風を感じることも、今ここに同い年の少年とこう思えた。

哲夫　……。

順子　……。

幸太郎　だから、オレと金坂はいろいろ話した。家族のこと。友達のこと。将来のこと。

哲夫　あの。

幸太郎　何だ。

哲夫　変なこと聞くようだけど。

幸太郎　ああ。

哲夫　その、何て言うか——オンナの体験はあったの、この時？

幸太郎　……。

哲夫　あつたんだッ。

幸太郎　想像に任せる。

哲夫　……。

幸太郎　しかし、そういうと何か意味ありげだな。ハッキリ言っておいた方がいいか　もしれんな。——まだない。

哲夫　……へえ。

幸太郎　そりゃ好きな女はいたりもしたが、今とは違う。秘めて思うだけだ。

順子　……。

幸太郎　だが、付け加えれば、こう見えて、若い頃のオレはモテモテだった。街角でオレが手を上げれば、婦女子たちがゴーゴー音立ててやって来たもんだ。

哲夫　そんな大袈裟な。

順子　でもモテたと思うな、あたしは。

幸太郎　ありがとう。うれしいよ、そう言ってもらえると。

順子　いいえ。

列車内の金坂が幸太郎を自分の方に向き直らせる。

金坂　ちゃんと聞いているのかよッ。

幸太郎　え？

金坂　えじゃないよッ。何だよ、人が真剣にしゃべってるのに。

幸太郎　あ、ゴメン。で、何の話しだっけ？

金坂　夢だよ、将来の夢。

幸太郎　ああ、そうか。

金坂　どう思う？

幸太郎 どう思うって？

金坂 だから、野球選手になること。

幸太郎 ああ——いいんじゃないか。

金坂 球、早く投げるのは苦手だけど、オレ、こう見えても足は結構速いんだ。学校の競争じゃいつも一番。

幸太郎 へえ。

金坂 だから沢村みたいに投手は難しいけど、内野手くらいにはなれるんじゃないかなって。

幸太郎 ああ、いいかもしれない。

金坂 けど困るのは戦争に勝った時だよな。

幸太郎 どういうこと？

金坂 だって今は「ストライク！」が「よしッ一本！」で、「ボール」が「ダメッ」だろ。

幸太郎 ああ。

金坂 調子、狂うじゃないか。「よしッ一本！」はまだ許せるとして、「ダメッ」はちよつとなあ。

幸太郎 そうかな。

金坂 そうだよ。投手がかわいそうじゃないか。投げる度に「ダメッ」——投げる度に「ダメッ」——球のコースじゃなくて、人格否定されてる感じがするんだよな。幸太郎 なるほど。ハハハハ。

金坂 ハハハハ。で、野沢くんは？

幸太郎 野川だよ、野川幸太郎。いい加減に覚えろよ。

金坂 あーほんとゴメン。

幸太郎 頼むよ、ほんと。

金坂 で、野川くんは何になりたいんだ？

幸太郎 まだわかんないけど。

金坂 そうか。

幸太郎 まあ、強いて言えば。

金坂 強いて言えば？

幸太郎 写真家かな。

金坂 写真家。

幸太郎 ああ、報道写真を撮る人。

金坂 新聞に乗るようなヤツをパシヤツ（と撮る）とやる——。

幸太郎 うん。

金坂 へえ。それもカッコいいかもな。

幸太郎 オレの親父、自転車屋だろう。

金坂 そう言ってたね。

幸太郎 手伝いさせられるんだ、いつも。朝から晩まで他人の乗る自転車のボルトくりくり回して、パシヤツしたタイヤに空気入れて、油で手なんか真っ黒で。洗っても落ちないんだよ、あの油。

金坂 そうなんだ。

幸太郎 親父は仕事、オレに継いでほしいみたいだけど。

金坂 イヤなんだ？

幸太郎 絶対、イヤだよ、自転車屋なんてッ。あんな貧乏臭え仕事——。

と言ってハッと口を押さえる幸太郎。

幸太郎（咳払いする）

哲夫（見て）……。

幸太郎 今のは無しだ。

哲夫 でも、聞いたけど。

幸太郎（金坂に）……そうか、野球選手か。いいなあ、夢があつてツ。うんツ。ハハハハ。

哲夫 ちよつと待って。

幸太郎 ……。

金坂 どうかした？

幸太郎 いや、何でもない。

哲夫 何でもないよッ。ちよつと聞き捨てならないんだけど、今のやり取り。

幸太郎 流してくれ。

哲夫 流せないよ。

金坂 イヤなんだ、自転車屋継ぐの？

幸太郎 その、だから——。

哲夫 答えてあげなよ。

幸太郎 ……ああ、イヤだよ！ あんなチューブとボルトの油地獄なんて、真つ平ごめんだよッ。

列車が駅に停車する。

ガクンと揺れて止まる青森行きの列車。

金坂 あ、ゴメン。ちよつと便所へ。

とその場を去る金坂。

幸太郎 あ、じゃあオレも。

と行こうとする幸太郎。

それを止める哲夫。

哲夫 ちよつと座ってよ。

幸太郎 おしっこだよッ。お前、これは新幹線じゃないんだ。だから、止まった時に行つとかなないと、後でとんでもないことになるんだよッ。

哲夫 いいから——。

と幸太郎を止める哲夫。

今まで金坂が座っていた場所に哲夫が座る。

幸太郎 そこは金坂の席だぞ。それにここはお前、昭和二十年五月の世界なんだから、オレの許可なく勝手に入るんじゃないッ。

哲夫 何怒ってんだよ。

幸太郎 ……。

哲夫 どういうことだよ。

幸太郎 何がだ。

哲夫 トボけないでよッ。今、言ったよね。

幸太郎 何を。

哲夫「ああ、イヤだよ！ あんなチューブとボルトの油地獄なんて、真っ平ごめんだ よッ」——それ、前にオレがここ出てく時に言った台詞じゃないかッ。

幸太郎 そうだったか。

哲夫 ……。

幸太郎 何だ、その目は。子供だよ、子供の言ったことだよ。

哲夫 納得できない。

幸太郎 ……順子さん、ちよつと。

順子 ハイ？

幸太郎、順子を自分に招き寄せる。

幸太郎 ほら見てみなさい。牛だよ、あそこに牛がいるぞッ。可愛いなあ。

哲夫 話、そらさないでよッ。

と、勢いよく洋子がやって来る。

洋子 何してるのよッ。喧嘩はしないって——。

いきなり「現実」が侵入してきたので困る三人。

蟬の声が聞こえてくる。

洋子 何してるの。

幸太郎 いや、何でもない。

哲夫 何だよ、大事なことだ。

洋子 いや、枝豆、足りてるかなあとと思って。

哲夫 足りてるよッ。

洋子（順子に）大丈夫？

順子（和室に戻り）大丈夫——だと思っ、うん。

洋子 そう。ならいいわ。……ごゆっくり。（と止まり）あ——。

順子「ビールは三杯まで」——。

洋子 ……よろしく。もうすぐできるからね。

とそそくさとその場を去る洋子。

幸太郎 じゃあ、続きやるか。ほら、どけそこ、邪魔だから。

と哲夫、動かず座っている。

哲夫 ……。

幸太郎 ……そうだよッ。認めるよ、その通り。オレも自転車屋を継ぐのはイヤだったんだよッ。そのどこが悪いッ。

哲夫 ……。

幸太郎 けど、当時の話だ。今はそんなこと少しも思っちゃいない。

哲夫 ……。

幸太郎 続き聞くのか、聞かないのか。

哲夫 聞くよ。けど、その前にひとつ。

幸太郎 何だ。

哲夫 オレはあんなひどい方はしなかったつもりだよ。

幸太郎 ヘッ。似たようなもんだ。

順子 続き、聞こう。ね。

と哲夫を促す順子。

庭を離れて元の和室に戻る哲夫。

順子 続き——お願いします。

幸太郎 うむ。

と、汽笛が聞こえる。

幸太郎 (窓の外に) おーいッ発車するぞッ。おーい！

と金坂が戻ってくる。

幸太郎 お帰り。ちゃんと尻は拭いてきたか。

金坂 ……。

幸太郎 どした、紙がなかったのか便所に？

金坂 (首を横に振る)

幸太郎 じゃあ何だ。

金坂 何でもない。

幸太郎 ?

ガクンと動き出す列車。
しばらく無言の二人。

幸太郎 どした、何かあったのか、便所で？

金坂 ……。

幸太郎 何だ。黙ってないで言えよ。

金坂 ちょっと不安になったんだよ。

幸太郎 何に。

金坂 軍隊生活だよ。

幸太郎 何だよ、いきなり——。

金坂 便所で隣にいた男。

幸太郎 隣にいた男？

金坂 髭面のこーんなでかいヤツだった。

幸太郎 それがどうした？

金坂 用が終わった後、尻に触って——。

幸太郎 尻に？

金坂 ああ。で、「へへへへ。美味そうな尻だ」って。

幸太郎 へえ。

金坂 オレは見ての通り色白だ。確かに尻もやわらかい。

幸太郎 だから何だ。

金坂 オレたちがこれから行くところには、さっきみたいな髭面の野郎どもがいっぱいいるんだろ？

幸太郎 まあ、な。

金坂 大丈夫かな。

幸太郎 何の心配してるんだよ。

金坂 だって、軍隊っていうのは男だけの世界だろ？

幸太郎 当たり前だ。

幸太郎、紙を出して何か書く。

金坂 だったら、オレたちみたいな少年兵は、一番狙われやすいんじゃないのか？

幸太郎 まあ。

金坂 そんな世界のことを考えたら、いてもたってもいられない。

幸太郎 余計な心配したって意味ないよ。

金坂 ……。

幸太郎、書いた紙を金坂に渡す。

金坂 何だよ。

幸太郎 オレの住所だ。戦争が終わったら、また会おう。

金坂（受け取って）……。

幸太郎 金坂くんのも書いてくれ、ここに。

と紙と鉛筆を金坂に渡す幸太郎。

金坂 ……ああ。

と住所を書く金坂。

金坂（書きながら）軽蔑してるんじゃないのか。

幸太郎 え？

金坂 オレのこと。

幸太郎 そんなことないよ。

金坂 でも——。

幸太郎 でも何だよ。

金坂 いろいろ弱音、吐いちゃったから。

幸太郎 軽蔑してるヤツにまた会いたいなんて言うか。

金坂 ……うん。

と住所を書く金坂。

幸太郎 オレだって同じだよ。

金坂 え？

幸太郎 けど、金坂くんみたいに素直になれないだけだ。

金坂（笑顔になる）

幸太郎（笑顔になる）

金坂、幸太郎に紙を渡す。

幸太郎 ありがとう。

金坂 こちらこそ。

二人、大事そうにそれぞれの紙をポケットにしまう。

幸太郎（哲夫に）いくつもいくつも駅に止まって、いくつもいくつもくだらない話をした。それは、端で聞いていたら、実にくだらない他愛ない話ばかりだったにちがいない。けれど、その話のくだらないひとつひとつが、死ぬことが今よりもずっと身近だったオレたちにとっては、とても重要だったし、貴かった。

哲夫（聞いて）……。
順子（聞いて）……。
幸太郎　そして、夜をひとつ跨いで、翌日の早朝。列車は八戸に到着した。

と列車はガクンと音を立てて止まる。
引率将校の「到着ッ。陸軍候補生は全員下車ッ」という声が聞こえる。
八戸駅の喧騒。
「第四中隊、整列！」「第二中隊、整列！」という上官の声。
荷物を持って立ち上がる金坂。

幸太郎　行こう。
金坂（うなづく）

別々の方向を向いて整列する二人。

金坂　野沢くん。
幸太郎　野川。
金坂　あ、ゴメン。野川くん。
幸太郎　ああ。
金坂　生きてまた会おうな。
幸太郎　ああ。

上官の「出発ッ！」という声。
行進して去る金坂。
それを見送る幸太郎。

幸太郎　こうして、オレは青森県にある所沢整備学校八戸教育隊に「陸軍特別幹部候補生」として入隊したんだ。

と座席から離れて元の場所に戻る幸太郎。
蟬の鳴き声が聞こえてくる。
幸太郎、ビールを飲もうとする。

幸太郎　ビールあるか。
順子　食前は三杯まで。
幸太郎　……。
哲夫　金坂さんは、いつ亡くなったの。
幸太郎　二週間前だ。脳溢血でな、突然のことだ。
哲夫　そう。

幸太郎 けれど、こいつとの話は、これで終りじゃない。

哲夫 と言うと？

幸太郎 少し疲れた。休憩だ。

哲夫 ……。

幸太郎 いいか。誤解するなよ。やってみてわかることだってある。あの時はわからなかった自転車屋のすばらしさをその後、オレは知っていくってことだ。

哲夫 そんなこと聞いてない。

順子 ハハハハ。

哲夫 何笑ってんだよツ。

順子 ごめんなさい。

哲夫 ツたく、こっちは六年間、ずっとオレなりに悩んでたんだからな。

順子 あたしに怒ることないでしょ。

哲夫 怒りたくもなるよ。親父、あの時なんて言ったか覚えてるのかよ。

幸太郎 何だ。

哲夫 オレが「もうここから出てくツ」て言った時だよ。

幸太郎 なんて言った。

哲夫 「野川の家は先祖代々、自転車屋の家系なんだツ。お前はそれを絶やすのかツ」

幸太郎 覚えてない。

哲夫 これだよ。信じられないよ、ホント。

順子 ハハハハ。

とそこに洋子がやって来る。

洋子 あら、何か盛り上がってる？

哲夫 盛り上がってなんかねえよツ。

洋子 準備ができたわ、御飯の。

幸太郎 ああ、そうか。

順子 ごめんなさい。手伝いもしないで。

洋子 全然。そんなことより男どもを二人きりにしておく方が心配なもの。

順子 フフ。

幸太郎 さ。飯だ。お前たちも早く来い。

と立上がり、部屋を出ていく幸太郎。

ビールの瓶などを片付ける順子。

洋子 それより、どうだった。

哲夫 どうだったって何が。

洋子 お父さんよ。ちゃんと話したの？

哲夫 したよ、昭和二十年の話。

洋子 昭和二十年？

順子 金坂さんとの出会いの話。

洋子 金坂さん？

順子 ええ。

洋子 そんなどーでもいい話してたの？

哲夫 ああ。

洋子 何してるのよ、もうッ。大事なのはそんな昔話じゃなくて現在、現在なのよッ。

哲夫 何興奮してんだ、お前。

洋子 興奮もするわよッ。何のために苦労して、あたしがこういう機会を作ったと思ってるのよッ。

と奥から幸太郎の「何してる。料理が冷めるぞーッ」という声。

洋子 ハイハイ。(哲夫たちに) もー頼むわ、ホント。早く来て。うるさいから。

哲夫 今行くよ。

洋子 ごめんなさい。順子さん、そこお願いね。

洋子、その場を去る。

ビールを片付けて、布巾で卓袱台を拭く順子。

哲夫 お前、あいつと何か共謀してねえか。

順子 何よ、共謀って。

哲夫 だって何か妙な目配せし合ってるように思えるんだけど。

順子 そんなこと——。(と拭く)

哲夫 ……。

順子 ふふふふ。

哲夫 何笑ってんだよ。

順子 別に。

哲夫 ……ッたく、人の気持ちも知らないでいい気なもんだぜ。

順子 けど、よかったじゃない。いい話、聞けて。

哲夫 ……。

順子 続きが楽しみ。(と行こうとて) あ——それ(仏壇の土産)持ってきて。向うで食べるから。ほら、みんな待ってるから。

とその場を去る順子。

哲夫、しばしもの思いにふける。

哲夫 ……。

そして、川の方角を見る。

哲夫 ……。

哲夫、土産を取りに行く。

そして、部屋から出て行くこうとしてふと仏壇を見る。

哲夫 ……。

哲夫、土産を持ってその場を去る。

と暗くなる。

明りが入ると前景の一時間後の同じ和室。
夜の七時くらい。

麦茶などを飲んでくつろいでいる洋子と順子。

順子は家族のアルバムを見ている。

その傍らに何冊かのアルバムがある。

順子 ハハハハ。何よ、「八王子のアラン・ドロン」って。

洋子 だって本人がそう言うんだから。

順子 わーッ。見て見て見てコレ。コレ、お父さんでしょ。

とアルバムを示す順子。

順子 ハンサムよ、すごクッ。

洋子 言ってなかった？ 「婦女子が音を立ててゴーゴーやってきた」って。

順子 言ってたッ。

洋子 何度も聞かされた、あたしも。

順子 そうなの——（写真を見て）嘘、似てるッ。

洋子 え？

順子 お母さん、洋子さんに。これ、結婚式の写真でしょ。

洋子 みたいね。

順子 可愛い、お母さんッ。

洋子（溜め息）

順子 どうしたの。

洋子 いい気なもんよね。

順子 何が。

洋子（顎で部屋の向こうを示し）こっちの気も知らないで。

順子 風邪引かないの、あんなとこで寝て。

洋子 いつものことよ。

順子 ……そう。

洋子 順子さんのお父さんはどうだった？

順子 え？

洋子 息子と——弟さんとあんな感じ？

順子 うちは弟がよくしゃべるから。

洋子 仲いいんだ。

順子 まあ。

洋子 いいなあ。長男がしっかりしてるところは。

順子 そのぶんあたしがいろいろ迷惑もかけたから。
洋子 と言うと？
順子 ほら、離婚とかいろいろ。
洋子 ああ——。
順子 あたし、父が亡くなる時、喧嘩したままだったの。
洋子 へえ。
順子 急だったってこともあるけど、前の晩、くだらないことでアレして。
洋子 ……。
順子 結局、「ごめんなさい」って言えずに。
洋子 そうなんだ。

とそこに哲夫が剥いた梨を持ってやって来る。

哲夫 お待たせいたしました、お嬢様。
順子 あ——ありがとうございます。
洋子 いいのよ、少しは何かやらせた方が。それに昔からうまいのよ、皮剥くの。
順子 そうなんだ。
洋子 食べて、これ。おいしいよ。
順子 いただきます。

と梨を食べる順子。

哲夫も食べる。

洋子 晩御飯おいしかった？
哲夫 ……うん。うまかったよ、すごく。なあ。
順子 うん、ご馳走さまでした。
洋子 答えるまでに間があったわね。
哲夫 そんなことないよ。
洋子 別れた旦那に言われたことあるのよ。
順子 何を。
洋子 「もう少しマシなもん作れないのかッ」て。
順子 そうなの。
洋子 その頃、あたしもまだ働いてたから、カッとなって「じゃあ自分で作ればいいじゃないッ」って怒鳴り返しちゃったけど。
順子 へえ。
洋子 あたし、やっぱりお料理習った方がいいのかな。
順子 今後の課題としておけばいいことじゃない、それは。
洋子 つまり、イマイチってこと？
順子 そんなことないわよ。

梨を食べる三人。

洋子 ところでさ、あのアップルパイ、どこの？

順子 うちの近くに老舗のケーキ屋さんがあつて、そのの。おいしいでしょ、あれ。洋子 もうおいしいなんてもんじゃないわよ。バカ美味。あたし、太るの承知で三つも食べちゃったわよ。

順子 今度来る時はもっと大きいの買ってくる。

洋子 やめてよ、あたしをこれ以上、太らせるの。

順子 そんな太つてないじゃない。

洋子 そう見えるだけなの。もうこのへん（腹）がヤバイのよ、三十越えてから。

順子 ダイエットとか気にするんだ。

洋子 そりやるわよ。まだまだオンナでありたいもの。ハハハハ。

女二人の会話をちよつと呆然と見ている哲夫。

洋子 え、何？

哲夫 お前ら、よくそんなにしゃべることあるな。

洋子 あるわよ。あっちゃいけない？

哲夫 いけなくはないけど、ちよつとうるさい。

洋子 兄さんみたい押し黙って何考えてるかわかんないのよりよっぽどいいじゃない。順子 あたしにはよくしゃべるけど。

洋子 そうなのッ。ちよつと信じられない。

と幸太郎がのそつとやつて来る。

幸太郎 すまんすまん、ついウトウトしてな。

洋子 来た来た、眠り親父が。（幸太郎に）これ（梨）食べて。お兄様が剥いてくれたんだから。

幸太郎 そうか。

順子 あ、これ（写真）見せてもらってます。

幸太郎 ああ——。

洋子 で、戦争の話はもう終わったの？

哲夫 終わってないよ。

順子 第一部は終わり。これから第二部。

洋子 そうなの。じゃあ、あたし、洗い物してくる。花火の前に片付けたいから、ごめんね。

順子 手伝おうか。

洋子 あーいいッ。料理はいまいちだけど、片付けは得意なの、あたし。（と行こうとして）あ、ビールは——飲んでないわね。ふふふふ。

とその場を去る洋子。

哲夫 よくしゃべるヤツだよ、ほんと。

順子 明るくていいじゃない。

幸太郎 ずいぶん仲がいいみたいだ。

哲夫 誰が。

幸太郎 女二人が。

順子 年齢も近いし。ハハ。

幸太郎 久し振りに聞くよ。

順子 何をですか。

幸太郎 この家で女同士のやかましい声をな。(と笑顔で言う)

順子 ごめんなさい。ふふ。

と花火の音が聞こえる。

順子 あ——もう始まるのかな。

幸太郎 いや、まだだ。あれはもうすぐ始まるという合図。

順子 そうですか。

幸太郎 ……。

哲夫 ……。

順子 けど、凄いですね。

幸太郎 うん？

順子 これ。

とアルバムを示す順子。

順子 知ってる？ これだけじゃなくて、あっちにもたくさん。

哲夫 ああ。

順子 しかも、こんなに几帳面に日付と場所まで書いてあって。

幸太郎 好きなんだな、そういう細かいことするのが。

順子 哲夫さんと大違い。

哲夫 そんなことないよ。オレだって細かいことは細かいよ。

順子 写真——お好きなんですか。

幸太郎 まあ、ね。

順子 素人写真じゃないみたい。

哲夫 言ってたじゃねえか、さつき。「自転車屋なんかじゃくて報道カメラマンになりたかった」って。

と幸太郎を見て皮肉っぽく言う哲夫。

幸太郎 ……。

幸太郎、アルバムを一冊、手に取る。

幸太郎 ま、どっちにせよしよせんは田舎の自転車屋のオヤジだ。それにわたしは文字を書く人間じゃない。コイツ（哲夫）と違つてね。

順子 はあ。

幸太郎 だから、これ（アルバム）がわたしの日記みたいなもんなんだ。

哲夫 ……。

幸太郎 からだはなくなくても——家族の記録は残る。

順子 ……。

とアルバムを見ながら幸太郎が口を開く。

幸太郎 お前の言つた通りだ。

哲夫 え？

幸太郎 オレのせいかもしれん——母さんを早く死なせちまったのは。

哲夫 ……。

幸太郎 家族のために働いてばかりいたからな。

哲夫 ……。

幸太郎 順子さんは聞いてますか。

順子 ハイ？

幸太郎 死んだ女房のこと。

順子 何となくは。

幸太郎 わたしがつもつと楽させてやれば、あんなに早く死ぬこともなかったのかもしれない。

順子 ……。

幸太郎 ずっとパートだ何だと働いてましてね。こいつ（哲夫）を大学にやれたのも母さんがいてくれたからです。

順子 ……。

幸太郎 六年前——アイツが死んで、こいつは啖呵を切つてココを出てきました。もちろん、稼業を継ぎたくもなかったこともあるんでしょうが、母さんをちゃんと守つてやれなかった親父への怒り（あれ）が大きかった——今思えばそういうことでしょう。

哲夫 ……。

幸太郎 かくして、こいつはココ（アルバム）から退場して六年です。（と冗談めかして言う）

順子 今日、再登場したじゃないですか。

幸太郎 まあ。（と苦笑）

遠くで花火の音。

哲夫 聞かせてよ、続き。

幸太郎 何？

哲夫 さっきの――。

幸太郎 ……。

哲夫 八戸では何をやってたのよ、軍隊で。

幸太郎 うむ。

哲夫 バンバン撃ち合ったりしたワケ？

幸太郎 訓練と飛行機の整備だ。来る日も来る日も。

哲夫 どんな訓練？

幸太郎 鉄砲の撃ち方や銃剣の使い方とか、そういうのだ。

哲夫 じゃあ「敵機発見ッ。撃てッ。ガガガガッ」って感じでもなかったんだ。

幸太郎 そうだな。けれど、何度か対空射撃があった。あの年の七月だったかな。

哲夫 何よ、対空射撃って？

幸太郎 飛来した敵の飛行機に向かって銃を撃つんだ。

哲夫 へえ。

幸太郎 自分の撃った弾がな、煙りを引いてこう光って飛んでくんだ。見ようによれば花火みたいに綺麗なものだ。

哲夫 ふーん。

幸太郎 それに空爆じゃ多くの仲間が死んだ。

順子 空爆？

幸太郎 米軍機が空からバラバラ爆弾を落とすんだ。目の前で直撃弾を受けて仲間の中隊が全滅したこともあった。

順子 ……。

幸太郎 訓練に明け暮れながらも死はすぐ隣にあった。

哲夫 ……。

幸太郎 しかし、何より辛かったのは腹が減ることだった。なんせこっちは食べ盛りの十七だ。

順子 何を食べてんですか。

幸太郎 五目飯、タクワン、すいとん。すいとんなんてわかるかな。

順子 何となく。

幸太郎 だから、あれに比べりゃどんなもんでも文句は言えない。

哲夫 洋子の作ったモンでも。

幸太郎 あれに比べりゃ百倍美味い。ハハハハ。

順子 ハハハハ。

順子 泣いたりしなかったんですか。

幸太郎 金坂とちがって、オレは見栄張って兵隊に行ったクチだからなあ。

順子 そうですか。

幸太郎 あーそうそう、一度だけ。一度だけ涙があふれて止まらなかったことがあった。

哲夫 上官に殴られて？

幸太郎 いや、お月様のせいだ。

順子 お月様？

幸太郎 辛い訓練が終わって、腹をすかせて兵舎に帰る。便所に入った。と、そこから夜空にポツカリ浮かぶ月が見えてなあ。「早くうちに帰りたい」——そんな思いがあふれて泣けてしょうがなかった。

順子 へえ。

遠くで花火の音。

順子 あ——あたし、洋子さん、手伝ってきますね。

と立って行こうとする順子。

幸太郎 いや、いてください。

順子 え？

幸太郎 あなたにも聞いてほしいんだ、これから話すことは。

順子 はあ。

幸太郎 つまらん話かもしれないが、こんな話をする相手がわたしにはもういない。

順子、元に戻って座る。

幸太郎 八戸での生活は決して楽しいもんじゃないが、今思うと、たくさんの戦友と出会えたことが何よりの財産だった。面倒をみてくれた渡辺中尉、片桐軍曹。同期生の玉井、佐々木、木村——みんな今でも鮮明に思い出すことができる。——ま、みんなもういなくなっちゃったが。ハハ。

哲夫 ……。

幸太郎 決して自分で望んだ戦争じゃないが、生死をともにして、そいつらと生きたあの三ヶ月は、たぶんオレの人生で、普通の暮らしの十年ぶんくらいの重さがあったんだと思う。

哲夫 玉音放送は八戸で聞いたの？

幸太郎 (うなずき) だが、電波の調子が悪くて、何を言ってるのかサツパリわからなかった。ハハ。

順子 広島と長崎に原爆が落ちたのは——。

幸太郎 それより前だな。広島が八月六日、長崎が八月九日。

哲夫 金坂さんはどうしたの。中隊でいっしょじゃなかったの？

幸太郎 一度もアイツに八戸の学校で会うことはなかった。まあ、そもそもあの当時、整備学校には九〇〇人からの少年兵がいたからな。

哲夫 ふーん。

幸太郎 しかし、オレはあいつと思いがけずに再会することになる。

順子 終戦後に？

幸太郎 ああ。

順子 どこですか。

幸太郎 八戸から東京へ戻る列車のなかだ。

順子 列車？

幸太郎 ああ。嘘みたいな偶然だが、行きもいっしょ、帰りもあの泣き虫野郎といっしょの列車に乗った

んだ。

と幸太郎は立ち上がり、回想が始まる。

幸太郎 終戦にともない、オレたち少年兵もみな故郷に帰ることになった。乗ったのは行きと同じ列車。昭和二十年八月二十二日の夜のことだ。そして、オレはそこで、短いオレの戦争体験のなかでも、最も印象的な出来事を体験する。

再び、幸太郎は古い帽子を被り荷物を取り出す。

4 く上野まで

八戸駅の喧騒が聞こえてくる。

幸太郎は縁側を越えて再び庭面に下りる。

哲夫と順子は、和室上からそれを終始、見ている。

と金坂が出てくる。

行きとは違い大きな荷物を持っている。

金坂、行きとは打って変わって生き生きしている。

金坂、荷物を下ろして庭面に座る。

金坂（窓の外に）あ、お婆さんッ。ココ、空いてますよッ。……乗らないの？ 何だ、そうか。ならいいです。ハハハハ。

幸太郎、列車に乗り込む体で通路（庭）を進み、金坂のところへ行く。

幸太郎 何だ、帰りは泣いてないんだな。

金坂 え？

と顔を上げる金坂。

幸太郎 久し振り。

金坂 のののの野沢くん！

幸太郎 野川だよッ。馬鹿ッ。

と抱き合う二人。

金坂 生き——生きてたんだなッ。

幸太郎 お前も元気そうだ。

金坂 ああ。よかったッ。ほんとよかったッ。ハハハハ。

と笑い泣きする金坂。

幸太郎 何だよ、また泣いてんのかよ。

金坂 行きとは違う。うれし泣きだッ。

幸太郎 元気だったか。

金坂 ああ。何とか生き延びたよ。

幸太郎 そうか。

金坂 ハハハハ。座れよ、ほら。早くッ。

と座席（庭面）に座る二人。
ポーツという汽笛が聞こえる。
ガクンと音を立てて発車する列車。
窓の外を見る二人。

金坂（外に）さようなら！ お世話になりましたッ。さようなら！

と手を振る金坂。

幸太郎 何だ、行きと違ってずいぶん元気いいんだな。

金坂 だって——これで帰れるんだよ、やっと。うれしくないわけじゃないかッ。

幸太郎 そりやそうだけど。

金坂 オレ、いつもお前のこと、探したんだけど。見つからなくて。

幸太郎 団体行動だからな、中隊は。

金坂 少し痩せたか。

幸太郎 お前もいっしょだ。とにかくロクなもん食ってないからな、オレたちは。

金坂 そりやそうだ。ハハハハ。

幸太郎 どうしてた？

金坂 聞いてくれッ。尻は無事だッ。

幸太郎 そうか。そりやよかった。ハハハハ。

金坂 ハハハハ。そつちは？

幸太郎 無事だよ、オレも。（と尻を突き出す）

金坂 じゃなくて、軍隊生活。

幸太郎 ああ——訓練、訓練、訓練。何のためにこんな遠くまで来たのかわかんないよ、ほんと。

金坂 ああ。けど、もう終わりだ。

幸太郎 ……。

金坂 何だよ、うれしくないのか。

幸太郎 そりやうれしいこともあるさ。やっと故郷へ帰れるんだから。

金坂 ならもっとうれしそうにしろよ。

幸太郎 簡単に喜んでばかりいられるかよ。オレたちはこれからアメリカに占領されるんだ。下手すればアメ公に殺されるかも。

金坂 そりやそうだけど、あんな生活とはおさらばできたんだ。オレはもうそれだけがうれしいよ、ほんと。

幸太郎 ほんとにお前は単純なヤツだなあ。

金坂 何とでも言えッ。

幸太郎（哲夫らに）帰りも行きと同じ二十時間。オレと金坂の長い旅がまた始まった。

哲夫、バッグからノートを取り出す。

そして、幸太郎の物語をノートに書き留め始める。

順子（それを見て）……。

ガダンゴドンと走る列車内。

金坂は荷物から弁当の包みを出す。

金坂 弁当の配給は？

幸太郎 もらった。

金坂 じゃ食おう。

幸太郎 ちよつと待てッ。

金坂 何？

幸太郎 今食うと後がつらいぞ、きつと。

金坂 そうかな。

幸太郎 そうだよ。後二十時間もあるんだぞ、上野まで。計算して食わないと。

金坂 わかった。少し我慢しよう。

と弁当を脇に寄せる金坂。

ガタンゴトンと走る列車。

幸太郎 オレたちがこつちに來たすぐ後、また東京で大きな空襲があつた話、知ってるか。

金坂 うん。同期生から聞いた。

幸太郎 大丈夫かな。

金坂 うちは田舎の方だから。

幸太郎 そうだな。

金坂、弁当が気になる。

幸太郎 それに噂じゃすげえ威力の新型爆弾が落ちて、たくさん人が死んだらしい。

金坂 ……。

幸太郎 ほんとアメリカのヤツらはひどいことするもんだよ。

金坂 ……。

幸太郎 何チラチラ見てんだよッ。

金坂 いやー。

幸太郎 食いたいなら食べばいいだろう。

金坂 だって。

幸太郎 だって何だよッ。

金坂 今食うと後がつらいって言ったじゃないか。

幸太郎 つらいけど食いたいんだろう。

金坂 そりやまあ。

幸太郎 何だよ、人が真剣な話してるのに、弁当チラチラ見て。失礼だよッ。

金坂 ごめん。

幸太郎 ……。

金坂 ……。

幸太郎 あーッ。お前が弁当に注意向けるからオレも弁当が食いたくなってきたじゃないかッ。

金坂 食うか、いつしよに？

幸太郎 先食えよ。オレはもう少し我慢する。

金坂 じゃあオレも我慢する。

幸太郎 いいよ、食えよ、先に。

金坂 ヤだよ。

幸太郎 なんで？

金坂 だって先に食って、オレの腹が鳴り出した頃、お前が美味そうに弁当食ってるのつらいもん。

幸太郎 つらいもんじゃねえよ。そういう想像力はちゃんと働くんだな。

金坂 ……。

幸太郎 オレは今、日本の置かれた厳しい状況について話してるんだよ。弁当のことなんか二の次だよ。

ガタンゴトンと走る列車。

幸太郎 中身、見たのかよ。

金坂 え？

幸太郎 その（弁当）中身、見たのかよ。

金坂 まだ。

幸太郎 見てみるよ。

金坂 いいよ。

幸太郎 なんで？

金坂 見たら食いたくなるじゃないか。

幸太郎 いいから見てみるよ。知りたいんだよ、中身が。

金坂 どうせ相変わらずの飯と梅干しだろ。

幸太郎 見てみなきゃわかんないじゃないか。

金坂 そんなに知りたいのなら、自分で見ればいいだろう。

幸太郎 わかったよッ。自分で見るよ。

包みを開けてみる幸太郎。

金坂 何だった？

幸太郎 予想通り。飯と梅干しだよ。

金坂 そうか。

黙ってしまふ二人。

幸太郎 オレが食えばお前も食うか。

金坂 ああ。

幸太郎 ふーん。

金坂 食わないの？

幸太郎 ……。

幸太郎、おもむろに弁当を食べる。

続いて、金坂が包みを開けてガツガツと弁当を食べる。

哲夫 食うんだ、結局。(とつぶやく)

幸太郎 ……何かオレは悲しいよ。

金坂 何が。

幸太郎 日本の厳しい状況と。

金坂 ああ。

幸太郎 自分の食欲の関係がだよ。

金坂 うん。

幸太郎 (食べる)

金坂 (食べる)

幸太郎 (モゴモゴしながら) とにかく腹が減って――。

哲夫 食べ終わってからでいいよ。

幸太郎 すまん。

順子、幸太郎にお茶を出す。

幸太郎 すまん。

順子 どういたしまして。

幸太郎、金坂にも茶をあげる。

金坂、「？」となるが飲む。

轟音とともに列車がトンネルに入る。

暗くなる幸太郎たち。

トンネルを抜ける列車。

幸太郎 とにかく腹が減って仕方なかった。日本の置かれた厳しい状況も大事だったが――。

金坂 (食べる)

幸太郎 腹が減って仕方ないことも大事な問題だった。

弁当を食べる金坂。

幸太郎 思い返せば、すべてのものが愛しく思えた行き列車とは大違いだった。これから死ぬかもしれないという心と、これから生きなければならないという心は、人間をこうも変えてしまうものなのか、と。

食べ終わる金坂。

幸太郎 何か――。

金坂 うん。

幸太郎 虚しいな。

金坂 ……うん。

ガタゴトと走る列車。

哲夫 何かわかるような気がする。

幸太郎 そうか。

哲夫 こんな映画があつてさ。

幸太郎 うん？

哲夫 主人公は定年間際の刑事でさ。もう危険な仕事からは引退して平凡に暮らしたいと思ってるんだ。けど、そんな時、主人公の老刑事は、医者から不治の病に犯されていて、余命は少ないってことを知るんだよ。

幸太郎 ああ。

哲夫 で、主人公の世界は一変するんだ。見るもの聞くもの全部愛しく見える。けど、それは医者の誤診だったんだ。主人公は実は元気だったんだ。そうしたとたん、今まで綺麗に見えた世界がまた元のつまらない世界に一変する――。

幸太郎 ……そうかもしれん。

ガタゴトと走る列車。

奇妙な音が聞こえてくる。

それは金坂の鼾である。

いつの間にか眠っている金坂。

順子 寝てるわ、この人。

鼾をかいて眠っている金坂。

幸太郎 食って寝る――人間として当たり前のことだ。しかし、鼾をガーガーかいて眠っているコイツを見ると、なぜか怒りが沸き上がってきた。

軒をかいて眠っている金坂。

幸太郎 穿ったことを言えば、飯を食らい、平然と眠りこけるこの男の姿に、少年のオレは、戦後の日本人が辿る姿を見たのかもしれない。

軒をかいて眠っている金坂。

それを見ている哲夫と順子。

幸太郎 叩き起こしてブン殴ってやろう——そう思って席を立った時だ。

金坂、寝返りを打つ。

金坂 母ちゃん、もうしないよ……。

眠り続ける金坂。

幸太郎 「母ちゃん、もうしないよ」——そう、金坂はそうつぶやいたんだ。

哲夫 ……。

順子 ……。

幸太郎 それを聞いて一気に怒りがしぼんでいった。そう、考えてみれば金坂もオレもまだ十七のコードモだった。

哲夫 ……。

順子 ……。

金坂 美代子……。

と寝言を言う金坂。

哲夫 何て言った？

順子 みよこ？

とゴーツと列車が軋みながら橋を渡る。

目を覚ます金坂。

金坂 あれ——眠ってたか、オレ。

幸太郎 ああ。

金坂 どこだ、ここ？

幸太郎 盛岡くらいだ。まだ先は長い。

金坂 そうか。

幸太郎 夢でも見てたのか。

金坂　なんで？

幸太郎　寝言言ってたから。

金坂　そうか。なんて言ってた？

幸太郎　「もうしないよ、母ちゃん」とか何とか。

金坂　そうか。参ったな、そりゃ。

幸太郎　悪さして叱られてたのか。

金坂　え、まあ。

幸太郎　お前、好きな女がいるのか。

金坂　なんで？

幸太郎　「美代子」とか何とか。

金坂　寝言で？

幸太郎　ツたくガキのくせして——いつちよ前に。

金坂　妹だよ。

幸太郎　妹？

金坂　話したろう。裁縫のうまい——。

幸太郎　……。

金坂　ハハハハ。夢のなかで美代子いじめてたら母ちゃんが来てな。

幸太郎　そうか。……馬鹿野郎ッ。（と金坂を叩く）

金坂　痛テッ。

幸太郎　ハハハハ。

ガタンゴトンと走る列車。

幸太郎　そうこうしているうちに夜が来た。

黙って目を閉じている幸太郎。

金坂、荷物を枕に眠ろうとするが眠れない。

金坂　……畜生ッ。

幸太郎　何だよ。

金坂　腹が減って全然眠れないぜ。

幸太郎　眠ってたじゃないかッ、さつき。

金坂　あれは弁当食ったすぐ後だから。お前は寝てないのか。

幸太郎　ああ。

金坂　後どのくらいかかるんだ、上野まで。

幸太郎（時計を見て）えーと、十時間くらいか。

金坂　そんなにあるのかッ。

幸太郎　だから言ったらろう、後でつらくなるって。

金坂　お前が食うって言うからオレは食ったんだ。

幸太郎 ちよつと待て。そもそも弁当の包み最初に出したのはお前だぞ。

金坂 けど、お前が食わなければオレも我慢したんだ。

幸太郎 馬鹿言うなッ。お前が弁当ばかりに気を取られて話、聞かないから仕方なくオレは――。

金坂 けど、最初に手をつけたのはお前の方だ。

幸太郎 何だよ、その言い方。いいか――。

幸太郎、反論したいが脱力する。

幸太郎 馬鹿馬鹿しいッ――こんなことで言い争って何になる。

金坂 ……。

ガタゴトと走る列車。

幸太郎（哲夫らに）まったく馬鹿みたいだが、こんな感じでオレたちは険悪な雰囲気だった。

聞いている哲夫と順子。

列車の金坂、幸太郎を促す。

金坂（小声で）おい――おいッ。

幸太郎 うん？

金坂 見てみるよ、アレ。

と別の座席の方を示す金坂。

金坂 黄粉餅だ。

幸太郎（哲夫らに）そこに黄粉のついた餅を食っている乗客がいた。

金坂（見て） ……。

幸太郎（見て） ……。

金坂、黄粉餅を食う男の真似をする。

箱から取り出して、口に運び、食らい、もぐもぐ噛み、喉を通す。

幸太郎 やめる、馬鹿ッ。みつともないッ。

金坂 ……くそッ。

幸太郎 帰ったらオレたちだつて食えるさ、ああいうのが、きつと。

金坂（泣きたい） ……。

幸太郎 そんな顔するな。

金坂 もういいよッ。

とふて腐れて目を閉じる金坂。

幸太郎（哲夫らに）空腹で眠れぬ夜を過ごした翌朝。腹が減り過ぎて、金坂はだんだん奇妙な行動を取り出した。

金坂、架空の饅頭を取り出す。

そして、おいしそうに食べる。

金坂 うまいッ。ハハハハ。

幸太郎 大丈夫か、金坂。

金坂 大丈夫じゃないよッ。ハハハハ。お前もどうだ。アンコのいっぱい詰まった饅頭だッ。ほらッ。（と架空の饅頭を薦める）

幸太郎 後少しだ。後少し頑張れッ。

金坂 もう限界だよ。ハハハハ。ハハハハ。ハハハハハ。（架空の饅頭を貪り食って泣く）

幸太郎、金坂を抱き締めてやる。

幸太郎（哲夫らに）泣きたいのはオレも同じだった。訓練も苦しかったが、こっちの方がある意味で何倍も苦しいことだった。

哲夫 確かに。

順子 わかるような気がする。

幸太郎 そんな時だった。アイツが現れたのは。

哲夫 アイツ？

順子 誰ですか。

ガクンと停止する列車。

と、一人の若い女がやって来る。

質素な服装の引つ詰め髪の女——白鳥政江。

大きな荷物を背負っている。

政江 ここ、いいですか。

幸太郎 どうぞ。

と幸太郎たち詰めて横に寄る。

政江 どうもありがとうございます。ご苦労様です。

と丁寧にお辞儀して幸太郎たちの横に座る政江。

政江 ほんと暑くてかなわないわ。（と汗を拭う）

幸太郎 はあ。

政江 具合が悪いですか。

幸太郎 え？

政江 お連れの方。

幸太郎 ああ、大丈夫です。ちょっと眠れなくて、その、アレして。

政江 兵隊さんよね。

幸太郎 ハイ。

政江 ご帰還ですか、東京へ？

幸太郎 そうです。

政江 どちらから？

幸太郎 青森の八戸から。

政江 それはそれは——ご苦労様でした。

幸太郎 いえ。

政江 失礼ですけど、おいくつですか。とても若く見えるけど。

幸太郎 十七歳であります。

政江 じゃあ、あたしの弟と同じ年だわ。

幸太郎 そうですか。

ポーツと汽笛が鳴り、ガクンと動き出す列車。

政江、荷物から包みを出す。

政江 これ食べてください。

と包みを幸太郎に差し出す政江。

幸太郎 これは——。

政江 お握りです。二つしかありませんけど。

金坂 おおおおお握り！ おにおにおにおにおにおにおにおにッ！

と狂喜して、幸太郎をバンバン叩く金坂。

幸太郎 静かにしろッ。

金坂 ……。

政江 どうしたの、大丈夫。

金坂 ハイッ。自分は大丈夫であります！

と敬礼する金坂。

政江 ふふふふ。元気がいいのね。

金坂 いえ、さっきまではありませんでしたッ。
政江 そうなの。ふふ。さ、遠慮しないで食べて。
金坂（幸太郎を見る）
幸太郎 いえ、いただけません。
金坂 おーいッ！

と、金坂、大きくズッコケる。

政江 なんで？ おなか減ってないんですか。
幸太郎 いえ、とても減ってます。

政江 じゃあどうぞ。

金坂 ハイッ。

幸太郎（止めて）おとなしくしてろッ。

金坂 ……。

幸太郎 ご厚意はありがたいんですが、これを頂くわけにはいきません。

政江 どうして？

幸太郎 この握り飯は誰のために作ったものですか。

政江 自分のためです、ここで食べようと思って。

幸太郎 じゃあ、自分たちがコレを食べたらあなたはどうするんですか。

政江 あたしは大丈夫です。そんなにおなか減ってませんから。

金坂 そうですね。ハハハハ。

幸太郎 静かにしてろって言ったろうッ。

金坂 けどー！。

幸太郎 いいから、ここはオレに任せろッ。

金坂 ……。

金坂は子犬のようにしゅんと座る。

幸太郎 この時代、腹の減ってない人間はそんなにいない。

政江 だから？

幸太郎 自分たちがこれを食べて満たされるといことは、他の誰かが満たされないということです。

政江 ずいぶん理屈っぽいのね。

幸太郎 理屈っぽかろうが何だろうが、そういうことです。

政江 ……。

幸太郎 それに「武士は食わねど高楊枝」と言います。

政江 はあ。

金坂 ちよっと失礼。

と政江に言い、幸太郎を隅に引っ張る金坂。

金坂 気でも違ったのか。せっかくの好意を無にするのかよッ。
幸太郎 ……。

金坂 何が「武士は食わねど高楊枝」だよ。だいたいオレたちは武士じゃないじゃないかッ。
幸太郎 自分の欲だけ満たされればそれでいいのか、お前はッ！

金坂 ……。

幸太郎 オレたちより腹のすいてる子供がいたらどうする？

金坂 どこにいるんだよッ。いるなら連れてきてくれよ。そしたら、あきらめるよ、オレも。いいじゃないか。な、いただこう。

幸太郎 ……。

金坂 じゃあいいよ。お前がもらわなくてもオレはいただく。

幸太郎 待てッ。

金坂 何だよッ。

幸太郎 貴様、それでも帝国軍人か！

金坂 負けたじゃないかッ。帝国はもうなくなるんだよ。

幸太郎 何だとッ。もういつペン言ってみろ！（と胸倉を掴む）

金坂 何遍も言ってる。帝国はもうないんだッ。

政江 やめなさいッ。何してるの、こんなところで。

とそれを止める政江。

ふいと背を向け会う幸太郎と金坂。

政江（周りの乗客に）すみません。何でもありませんから。ほら、座って。こっちに、ほら。

と二人を元の位置に座らせる政江。

政江 こんなことで喧嘩しないでください。喧嘩は——もうたくさん。

とポツリとつぶやく政江。

ガタゴトと走る列車。

政江 じゃあ、こうしましょう。

金坂（見て） ……。

幸太郎（見て） ……。

政江 今からあたしがお二人の前でこれを食べます。

金坂 え？

政江 それでもいいならご自由に。

政江、包みを開けてお握りを出す。

金坂（注目してゴクリと唾を飲む）

幸太郎（注目してゴクリと唾を飲む）

政江（食べようとす）

二人、正視できずに顔をそむける。

政江 ハハハハ。

と笑い出す政江。

政江 ハハハハ。意地っ張りね、ほんと。

幸太郎（目をそらす）

政江 あなた——お名前は？

幸太郎 野川幸太郎。

政江 あなたの言うことはとても立派だと思えます。けれど、これを作ったあたしが、お国のために苦
勞してきた弟みたいなお二人にコレを食べてもらいたいと思う——食べる理由はそれだけじゃ足りない
かしら？

幸太郎 ……。

金坂 ……。

政江 いつもじゃダメだけど、甘えていい時は甘えていいのよ。

幸太郎 ……。

金坂 ……。

政江 どうぞ。

と握り飯を差し出す政江。

幸太郎の目に涙があふれてくる。

そして、金坂の目にも。

幸太郎 いただきますッ。

金坂 いただきますッ。

と深く一礼する幸太郎と金坂。

二人、握り飯を受け取って食べるように食べる。

幸太郎 うまいですッ。

金坂 うんッ。

政江 ふふふふ。

と姉のような視線で二人を見て笑う政江。
そして、二人に水筒の水をやったりする。

幸太郎（泣きながら食べる）

金坂（泣きながら食べる）

その姿がある感動をもって見ている哲夫と順子。

時間をかけていいので、ちゃんと全部、食べたい。

食べ終わる幸太郎と金坂。

幸太郎 何の変哲もない塩味の握り飯——だが、それまで食ったどんな食い物よりもあの握り飯は美味かった。

哲夫（うなづく）

順子（うなづく）

走る列車内の政江と金坂は無言でしゃべっている。

幸太郎 その日、彼女は東京にいる家族のために食料を買い出しに水戸に行ってきた帰りということだった。

金坂としゃべって笑っている政江。

幸太郎 列車はそれから数時間後に上野に到着——行きとはまったく違う風景がそこにあった。辺り一面焼け野原。粗末なバラック小屋のような建物ばかりが目についた。赤ん坊を背負った母親の姿が見える。しかし、その風景に赤ん坊は妙にそぐわないように見えた。

窓の外（舞台前面）を呆然と見る金坂と幸太郎。

夕刻の近い時間である。

と列車がガクンと音を立てて止まる。

上野駅の喧騒が聞こえてくる。

「上野ーッ上野ーッ」という声が聞こえる。

荷物を持って行こうとする政江。

幸太郎 あのッ。

政江（止まって振り返り）ハイ？

幸太郎 名前、教えてください。

政江 ごめんなさい。言ってもませんでしたか。

幸太郎 ええ。

政江 政江です。白鳥政江。

幸太郎 ……お元気でッ。

政江 お二人も。

金坂 ありがとうございますッ。(と深く頭を下げる)

幸太郎 (頭を深く下げる)

政江は大きな荷物を背負って、遅しく去る。

それをいつまでも見送っている幸太郎と金坂。

順子(哲夫に) どうしたの？

哲夫 白鳥政江……。

幸太郎 オレたちに列車で握り飯をくれたその女——それが白鳥政江。後にオレが結婚するお前のお袋だ。

順子 そうなんですかつ。

幸太郎 (うなづく)

哲夫 ちょっと待ってよ。

幸太郎 何だ。

哲夫 お袋とは友達に紹介してもらって結婚したんじゃないのかよ。

幸太郎 そうだ。だが初めて会ったのはこの時だ。

哲夫 なんて黙ってたんだよ、ずっと。

幸太郎 決まってるだろう。恥ずかしかったからだ。

哲夫 ……。

と、いつの間にかそこは喧騒の上野駅構内になる。

立っている幸太郎と金坂。

幸太郎 オレたちもここでお別れだな。

金坂 うん。

幸太郎 オレはこっちだ。

金坂 うん……。

幸太郎 なんて顔してるんだよ。

金坂 いや——。(と泣いてしまう)

幸太郎 何泣いてんだ、馬鹿ッ。

金坂 すまないッ。

幸太郎、手を差し出す。

金坂、その手を取る。

幸太郎 元気でな。

金坂 必ず連絡するから。

幸太郎 ああ。

金坂 ……野川くん。

幸太郎 うん。

金坂 さよならッ。

と泣いてその場を去る金坂。

幸太郎 こうしてオレの昭和二十年の三ヶ月は、金坂の涙で始まり金坂の涙で終わった。

喧騒が遠ざかっていく。

幸太郎、元の居間に戻ってくる。

幸太郎 幸運にもオレの家族はみな無事だった。親父もお袋も、姉も。戦争は終わったんだ。

それを聞いている哲夫と順子。

幸太郎 翌年、学校を出たオレは、親父の自転車屋で働く生活が始まった。そして、金坂と再会。毎年、暮れになると、旧交を暖めることになった。何年目のことだったか——金坂が何気なく提案した。

哲夫 何を。

幸太郎 「列車でオレたちに握り飯をくれたあの女の人にお礼を言おう」と。

哲夫 ……。

順子 ……。

幸太郎 それからオレと金坂は八方に手を回して、名前しかわからないあの女の人の搜索を始めた。

哲夫 ……。

順子 ……。

幸太郎 簡単にはわからなかった。しかし、水戸から乗って上野で降りたことはわかっている。それだけを頼りに、オレと金坂はあの人を探した。

哲夫 うん。

順子 ……。

幸太郎 見つけたのはオレじゃなくて金坂だった。彼女——つまり白鳥政江は、下町両国で染め物業をしている家の娘さんだった。

哲夫 ……。

順子 ……。

幸太郎 金坂とオレは、彼女に丁寧に手紙を書き「もし嫌でなかったら一度、お会いしてお礼を言わせてください」とそこに書いた。

順子 それで？

幸太郎 会ったんだ、彼女に。終戦からすでに八年。オレは二十六歳になっていた。

順子 お母さんはいくつだったんですか。

幸太郎 三つ年上の二十九だ。

順子 へえ。

哲夫 つまり、友達の紹介っていうのは金坂さんのこと？

幸太郎 ああ。

哲夫 ……。

幸太郎 けど、もしかしたらアイツも政江のことが好きだったのかもれん。

哲夫 ……。

順子 お父さんがプロポーズしたんですか。

幸太郎 うむ。

順子 キャーッ。

幸太郎 けど、よくよく考えると、最初の出会いがマズかった。

哲夫 どういう意味？

幸太郎 何と言うか——ご馳走したんじゃないくて、ご馳走されたことにどこか引け目がある。だからいつも頭が上がらない。

哲夫 ……ハハ。

順子 ハハハハ。

幸太郎 他人にはどんな時も親切にしよう——どこまでそんなことができたかはわからんが、少なくともそんな風に思っ生きてこれたのは、アイツとの出会いのせいだ。——ま、当のアイツにオレは不親切だったが。

哲夫 ……。

と花火の音が聞こえる。

順子 金坂さんはその後、どうなったんですか。

幸太郎 人の人生というの不思議なものだ。

順子 と言うと。

幸太郎 あの泣き虫野郎は、戦後はしたたかに生きた。小さな旅館から始まり、ホテルの社長になった。今じゃあいつが経営するホテルは全国に三十もある。

順子 ……。

幸太郎 大成功の人生だった——けれど本人はいつまでも気さくない親父だった。

哲夫 ……。

と洋子が戻ってくる。

洋子、いつの間にか浴衣を着ている。

洋子 もうそろそろ始まるわよ。

幸太郎 何だ、お前——ずいぶん洗い物に時間かかると思ったら。

洋子 いいじゃない。毎日、自転車相手だから、たまにはこういう格好しないとオンナであることを忘れてしまいそうで。ふふ。

順子 似合うッ。

洋子 ありがとうッ。そんなこと言ってくれるのは順子さんだけ。ハハハハ。

順子 ハハハハ。

幸太郎 聞いてたんじゃないだろうな。

洋子 何を。

幸太郎 オレの話だ。

洋子 聞いてないわよ。なんで？

幸太郎 戻って来るタイミングが凄くいいからだ。

洋子 話、終わったんだ？

幸太郎 ああ。

洋子 そりやご苦労様でした。退屈だったでしょ、ごめんね。

順子 ううん。すごく——面白かったッ。

洋子 さあ、行こう。(時計を見て) ほら、この花火は始まりが凄いんだから。

と順子を促す洋子。

順子と洋子は玄関の方に去る。

舞台に残る哲夫と幸太郎。

哲夫 洋子は知ってるの、今の話。

幸太郎 いや——初めて話した。

哲夫 ……。

幸太郎、仏壇の前に座る。

幸太郎 話は終わりだ。行ってこい。

哲夫 うん。

庭先に洋子が哲夫の靴を持ってくる。

続いて順子。

洋子 ほら、兄さん行くよ。履いて履いてッ。(順子に) さささ行こう。

と行こうとする洋子。

順子 ちよつと。(と止める)

洋子 何？

順子 聞かないの？

洋子 何を。

順子 だから——その、二人が仲直りしたかどうか。

洋子 そんなのは後回しッ。この花火は最初が見物なの。ほら早く！

とその場を去る洋子。

順子 (哲夫を見る)

哲夫 (苦笑)

順子 ……早く来てね。先、行くから。

と庭先から洋子を追って去る順子。
靴を履く哲夫。

幸太郎 どした？　ぐずぐずしてると始まるぞ。

哲夫　なんで？

幸太郎　……。

哲夫　なんで、オレにそんな話、聞かせたんだよ。

幸太郎　聞きたいって言ったろう、戦争の話を。

哲夫　……。

幸太郎　だからしゃべった——それだけだ。

哲夫、舞台前方の川にかかる橋を見る。

哲夫　できたんだね。

幸太郎　うん？

哲夫　橋——。

幸太郎　ああ。

哲夫　……。

幸太郎　渡れない作りかけの橋も——いつかは架かる。

哲夫　……。

花火の音——。

哲夫　じゃあ先に——。

幸太郎　今度はしくじるなよ。

哲夫　え？

幸太郎　順子さんと。

哲夫　ああ。

と去る哲夫。

舞台に一人残る幸太郎。

幸太郎　……。

とアルバムをパラパラとめくり、閉じる。

そして、仏壇を見る。

印象的な明りで浮かび上がる仏壇。

幸太郎（見て）……。

と「ババババババツ」と物凄い音がして花火大会が始まる。
ふと花火を見上げる幸太郎。
仏壇（政江）が残って、舞台は闇に消えていく。

「参考引用文献・資料」

- 『実録昭和史1・2』（ぎょうせい）
- 『一少年の観た「聖戦」』（小林信彦著／ちくま文庫）
- 『戦争論1〜3』（小林よしのり著／幻冬社）
- 『誰も「戦後」を覚えていない』（鴨下信一著／文春新書）
- 『戦中用語集』（三國一郎著／岩波新書）
- 『あの日、何があったのか？』（細川隆元著／ランダム出版）